

第3回「北海道子ども木工作品コンクール」に寄せて

北海道立旭川美術館長 高橋 洋

はじめに

北海道立林産試験場・北海道林産技術普及協会主催の第3回「北海道子ども木工作品コンクール」は、7月23日から8月27日にかけて開催された「木のグランドフェア」の一環として行われました。全道から個人部門参加校49校348点、団体部門4校5点、合計参加校53校、作品数357点の応募があり、創意工夫に富んだ優秀な作品が集まりました。

このコンクールは木工工作部門とレリーフ部門の2部門に分かれておりますが、それぞれの部門ごとに、入賞作品の特色と傾向を挙げてみます。

木工工作部門の作品について

小学生個人の作品

「金賞」に輝いた阿寒町立布伏内小5年土居麻子さんの「原始人」(写真1)は、丸太の木片を金具や接着剤でつなぎ合わせた彫刻的な作品で、大小の木片を上手に組み合わせて、ひょうきんな表情や動作がよく表現されています。材料の使い

方も、小丸太の棒状の部分や円盤に切った部分、切った木の断面の模様や樹皮をそのまま残した部分などを、よく工夫して使っています。

「銀賞」の中標津町立計根小6年山口寿代さんの「白ねこ黒ねこ小物入れ」(写真2)は、猫の可愛い表情がよく彫り上げられており、塗装も配色が工夫されています。大切な宝物をしまっておくには、とてもよく似合います。同じく当麻町立当麻小4年今村優司君の作品「くつほし」



写真2 銀賞「白ねこ黒ねこ小物入れ」



写真1 金賞「原始人」

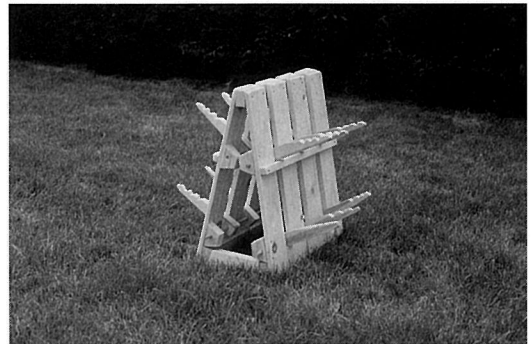


写真3 銀賞「くつほし」

(写真3)は、実用的な機能を考えて、汚れやすい運動靴や雨に濡れた靴を乾燥させやすいように、木の腕に靴が落ちないような角度と滑らないように刻みを入れており、また、使わない時はかさ張らないように、腕木を畳む工夫がされています。可動式の腕木の止め方は随分と苦勞したことがうかがえます。

「銅賞」の阿寒町立布伏内小6年大森智典君の「恐竜」(写真4)、同校5年大森高幸君の「アフリカ」(写真5)は、作品が一つではなく、中心になる恐竜やゴリラなどの周囲に、更にいろいろな動物などを配置し、ちょうど箱庭風に恐竜時代やアフリカの野生動物が棲む環境を、情景的に表しているのはおもしろい発想です。美瑛町立美瑛小4年滝田美早君の作品「森の椅子」(写真6)は、板の組み合わせ方や作り方がとてもしっかりしていて、4年生の作品としては、努力の甲斐があつてとても素敵な作品になりました。相当体重のある大人でも十分安心して座れますし、白木仕



写真6 銅賞「森の椅子」

上げの作り方なので、家の芝生の庭や公園の緑の中に置くのが雰囲気からみても似合いそうです。

「奨励賞」にも、楽しい工夫のある作品がありました。阿寒町立布伏内小5年高橋巨君の大作「ロボット貯金箱」は、細い木で文字や模様を作り出しており、木の組み合わせ方も随分工夫しています。こんな大きな貯金箱に一杯お金がたまったら、大変な金額になるかも知れません。中標津町立計根別小6年竹下寿代さんの「不思議な顔の小物入れ」は、友達顔でしょうか、表情豊かな顔がいっぱい箱の面についていて、みる角度で表情が変わり、部屋に置いておいても楽しい作品です。旭川市立北光小5年竹林智哉君の「はばたけ鳥」は、木の枝を使った作品ですが、身の回りにある木の枝から見つけた形を生かして、元気のいいこれから力一杯飛び立とうとしている鳥の様子がよく表れています。それにしても、いい枝振りの木がよく見つかりました。同校の5年樺沢清香さんの「バラの花」は、女の子らしい作品で木の薄皮がじょうずに工夫して使われています。同校の5年菊池夏美さんの「動物達のえんそう会」は、枝の切り方の工夫や松かさとの組み合わせで、面白い作品に仕上がりました。指揮者も木の枝から少しはなれて配置されていて、演奏会のステージの感じがよく出ています。陸別町立陸別小6年浜田光二君の「箱作り」は、箱のふたを魚の「カレイ」か「ヒラメ」に見立て、口の部分や尾の部分に工夫があり、楽しい作品になっています。出来てみれば簡単なようですが、こんな独創的な発想はだ

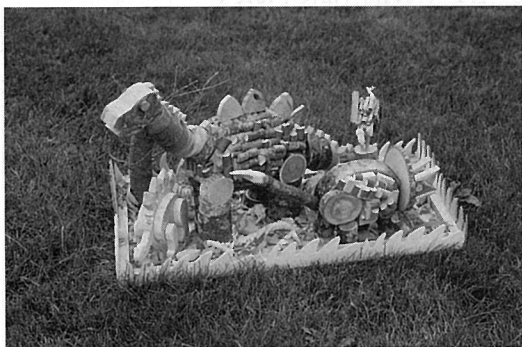


写真4 銅賞「恐竜」

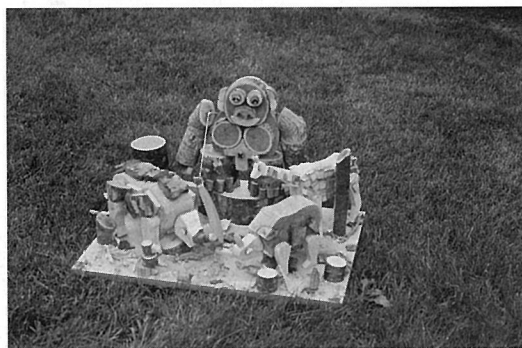


写真5 銅賞「アフリカ」

れにでも出来ることではありません。同校6年高橋舞さんの「箱」は、箱の作りもしっかりしていますが、仕上げの配色と太い線の模様が大胆で、とてもすっきりした作品になっています。倶知安町立北陽小4年高橋慶輔君の「きょうりゅうと人」は、簡単に作っているようですが、角度をつけた木片の使い方や木の枝との組み合わせが面白く、恐竜や人の体の表情がよく表されています。

小学生の工作は、作りたいものの夢がいっぱい満ちていて、更に、自分なりの使い勝手を考えた工夫をすることが、何より大切なことです。ともすると、指導している先生方から、作品の仕上がりの美しさや技術的な巧みさを必要以上に要求することがあると、技術力の限界や工具使用の不熟さから、抵抗感や挫折感が生まれ、折角の子どもらしい夢や楽しさが薄れがちになるものです。低学年ほど、作りたいものへの夢や願望、構想段階での素材との触れ合いから生まれる新たな発想の展開などを大切にし、完成した後も、大人からみれば不足の部分も、子どもにとっては作品に掛けた夢が、それを十分補っていることを重視したいと思います。

小学生団体の作品

今年も共同作品では、置戸町立勝山小から二つの共同製作の作品が出品され、小学生の技術を遙かに超えた立派なものでした。4、5年生の「鳥を守れ！木を守れ！」(写真7)は、テーマがはっきりしていて、子どもらしい願いが端的に表現されていますし、素材も合板や木片の単材、松かさ



写真7 金賞「鳥を守れ！木を守れ！」

なども多様に使われています。また、丸い穴の開いた多角形を球状に接合するという、接着面の角度の決め方や縁の面の取り方など、大人でも難しい技法に取り組んで随分と苦労が大きかったと思います。

「銀賞」(写真8)の6年の作品「岩山にそびえたつ城」は、細かい細工の多い作品ですから、四層の城の構想や図面を正確に作る段階、丁寧な窓の棧の削り出し方や組み方と瓦の並べ方、あるいは山頂の荒々しい岩山を表すために木の瘤や固まりを使っの表し方などに並々ならぬ工夫と努力が見られます。

大きな箱庭風に仕立ててあり、細部の正確さとともに遠くから離れてみても、なかなか迫力のある作品でした。「銅賞」の旭川市立北光小5年による「人魚姫とお友だち」(写真9)は、海に棲む動物たちが表情豊かに表現された夢に溢れた作品で、いろいろな素材の特徴を考えて生かしている「レリーフ」の作品です。背景になっているべ

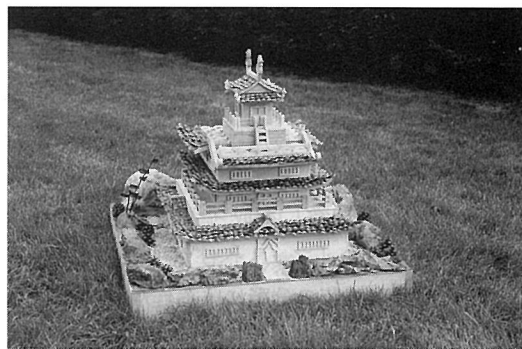


写真8 銀賞「岩山にそびえ立つ城」

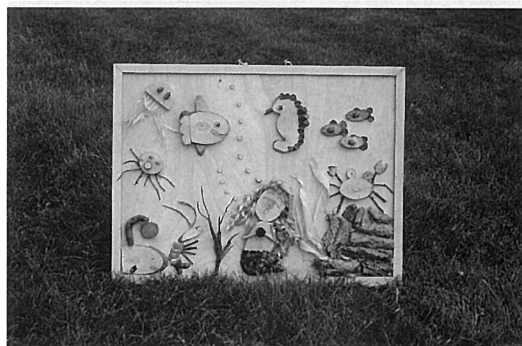


写真9 銅賞「人魚姫とお友だち」

ニヤの木目も、海の中の潮の流れを感じさせているようです。

小学生の木工では、素材となる木材も、規格品よりいろいろな形（素材の大きさ・長短・四角や三角・木のこぶや枝など）や特徴（材料の色・木目・柔らかさや硬さなど）を持った端材を豊富に与えた方が、色々な要素からの発想が広がり、おもしろい作品になる可能性があります。

木工具の使い方にしても、よく切れる刃物ほど無駄な力が要らないので、怪我は少ないのです。学校などでは、工具の手入れが十分でないことが多いので、事前の点検と整備は、欠かすことが出来ません。その上で、鋸を始めノミや彫刻刀など刃物を使う場合は、保持具（「木工万力」や工作台の材料を掛ける「当て木」など）を準備することで、材料をしっかりと固定できるようにすることが大切なことです。

中学校個人の作品

中学生の作品は、この年代から自分の日常生活に深く根差したデザインが目立ちました。実用的な用途を分析し、使う材料の特性を生かす工夫がみられ、そこに自分ならではの夢を盛り込んで行く姿勢が、強く感じられました。

その点では、「金賞」を取った札幌市立稲穂中3年の安田豊君の「アッ！へびだ！」（写真10）は、現代的な木工芸の分野に入る作品で、自由な発想と精巧なからくりを工夫している作品です。素材も太い二股の枝を台座に使い、シンプルな形に彫り上げられた鳥を羽ばたかせる機構と枝の芯

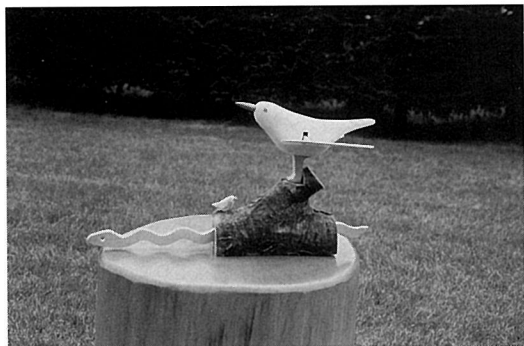


写真10 金賞「アッ！へびだ！」

の穴を通して蛇が抜け出て来る仕組みが連動していて、内部の機構を考え、製作する苦勞が大きかったと思いますし、仕上げも丁寧でとても優れた作品になりました。このような「からくり」は、昔から日本人の得意とする分野で、これらに関する研究図書も最近では出版されています。また、中学生による様々な工夫を加えた作品をみたいものです。

「銀賞」の同じ学校2年西川幸輔君の「収納ボックス付きベンチ」（写真11）は、自分の生活で最も欲しいものを自分の手でデザインし、製作した作品だろうと思いますが、実に合理的に計算して作り上げています。木取りや接合も正確で頑丈に作られており、仕上げも美しく出来上がっています。

散らかりやすい中学生の年代の自室には、まさにぴったりの家具で、西川君の部屋は、これで相当片付くことになると思われます。

同じ銀賞の北海道教育大学附属函館中学校2年

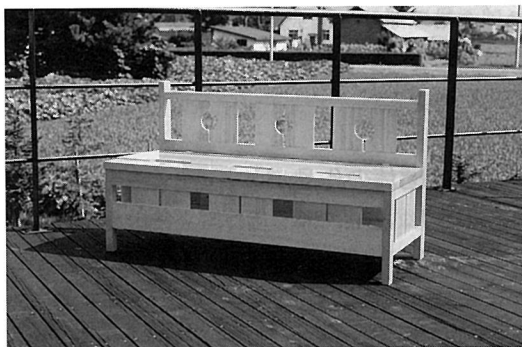


写真11 銀賞「収納ボックス付ベンチ」



写真12 銀賞「インテリア照明」

田嶋慎一君の「インテリア照明」(写真12)は、手元を明るくする実用面より、室内の雰囲気醸し出すことを重視した照明器具です。中世の城門を思わせるデザインは、台座の上に色変わりの象眼モザイクの模様を入れて石畳の感じを出し、彼の夢や憧れをよく表現しているように思われます。材料の使い方や仕上げにも、彼の真面目で几帳面な性格が映し出されているようで、素晴らしい作品になっています。毎年のように、このような照明器具が出品されますが、田嶋君の今年の作品は、デザインも製作技術の面でも、優れていました。

銅賞の札幌市立稲穂中3年天道大輔君の作品「犬小屋」(写真13)は、実にしっかりと堅牢に作られており、材料の木目や節が生かされて装飾効果を生み出し、丁寧な仕上がりになっています。大型犬も住める犬のマンションといった作品です。

札幌市立稲穂中3年澤田太志君の作品「花と花瓶」(写真14)は、丸く切った積層材を更に重ね



写真13 銅賞「犬小屋」

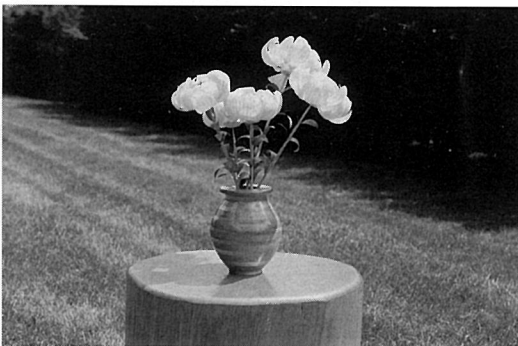


写真14 銅賞「花と花瓶」

て接着し、旋盤を使う「くりもの」の様に丁寧に曲面を成形した均整のとれた花瓶は、積層材の切り口自体が美しい紋様を作り出しています。また、活かしてある花も木の薄皮を使い、花びら部分に反りを入れる手法を生かして見事な花を作り出しています。木の薄皮細工は、古来からある技法ですが、花のほかにも使い方を工夫すると、新しい造形が生まれるかも知れません。北海道教育大学附属函館中3年高橋勝也君の「本棚と棚」(写真15)は、丈夫に丁寧に作られた作品で、自分の本とともに少し大きな飾り物やモデルシップでも置けそうな空間を組み合わせています。広い背板部分には、写真や絵を貼ることもでき、工夫するといっそう雰囲気のある棚になる可能性があります。

奨励賞も、よくできた作品が多かったと思います。札幌市立稲穂中3年菊池昌哉君の「花台」は花を乗せる可愛い三脚のテーブルですが、三本の脚のつけ方や柱部分の溝のつけ方、仕上げの塗装など、細心の配慮が行き届いている完成度の高い作品です。同校3年伊藤義浩君の「カワセミ」は何種類かの板の色の違いや特徴を生かした象眼のレリーフで二重の額縁の色との組み合わせも成功しています。追分町立追分中3年仲治大輔君、平沖匡志君、時崎仙浩君の「ペンスタンド」の作品は、丸彫りや板の貼り合わせとそれを組み合わせで作った作品で、発想の楽しさや単純化された形態の美しさが特徴的に表現されたよい作品です。

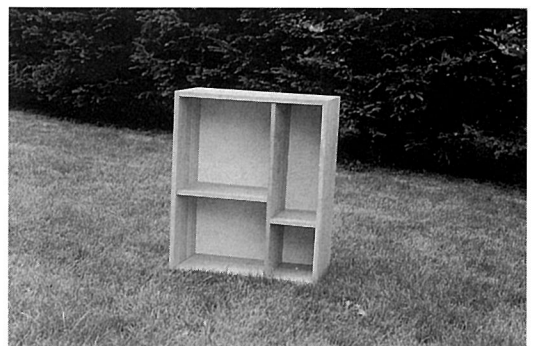


写真15 銅賞「本棚と棚」

本別町立勇足中3年川上貴将君の「本棚」は、棚の中にもう一つの棚が作られ、それが左右に移動する仕組みの作品で、棚を有効に活用する仕組みですが、一方では「隠し棚」を仕組んであるようにも思われて、発想が面白いと思いました。

中学生段階では、形態の美しさと形を生かす装飾の在り方や使用目的に応じた機能性を考えながら、材料を選択したり作品の構造的な強さに工夫を働かせる構想段階、下書きを通じて作品のデザインを検討する過程など、制作に入る事前指導が重要な意味を持つと考えられますし、技術的にも相当レベルも上がってきますので、工具の基本的な扱い方と応用技術の習得や必要な補助具を工夫する指導が大切になると思います。

中学生団体の作品について

今年は、中川町立佐久中の「信愛の像」1点だけの応募でした。もう少し構想段階で、主題をどのように表現するのか、木の組み立て方を工夫したり、木を削り出した平面部分の絵も全体の形との調和について十分に練ると、更に面白い作品になったと思います。

レリーフ(「アート彫刻板」)部門の作品について 小学生の作品について

「金賞」の旭川市立千代が岡小5年湯浅寛美さんの「コスモス」(写真16)は、大胆な構図と彫刻刀の鋭く細い線の使い方や中心部分が浮き出すようにした彫り方に工夫が見られ、なかなか美しい作品になりました。



写真16 金賞「コスモス」

「銀賞」の同じ学校の6年矢野なな江さんの「水ばしょう」(写真17)は、湯浅さんとは対照的に、積層の木の部分や色の部分を平らに削る方法で、水芭蕉の大きな花の伸びやかな感じをよく表現されています。同じ銀賞の旭川市立近文小5年阿部亜由美さんの「クジャク」(写真18)は、彫りによって現れる縞紋様を計算しながら、放射状に広がるクジャクの尾羽根の美しさをよく表わしています。

「銅賞」の旭川市立千代が岡小6年戸田昭弘君の「わたり鳥」(写真19)は、2羽の鳥の配置や構図、鳥の感じと空の表現の違いを彫り分けており、全体としてとても大きな絵のように見えます。旭川市立西神楽小5年小澤雄大君の「ブラックバス」(写真20)も、水の流れると魚の鱗の彫り分け

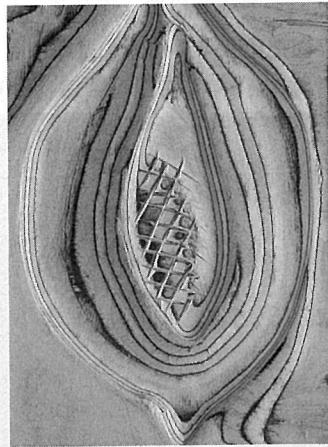


写真17 銀賞「水ばしょう」

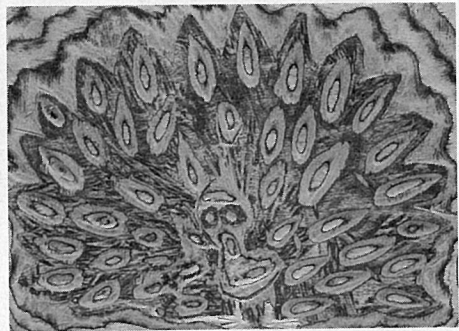


写真18 銀賞「クジャク」



写真19 銅賞「わたり鳥」

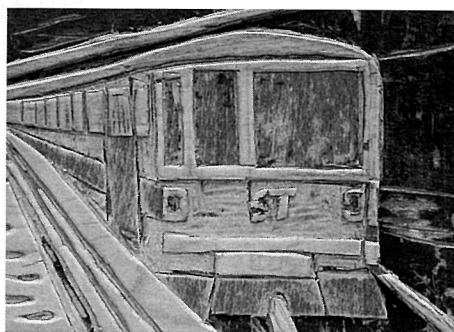


写真21 銅賞「地下鉄」

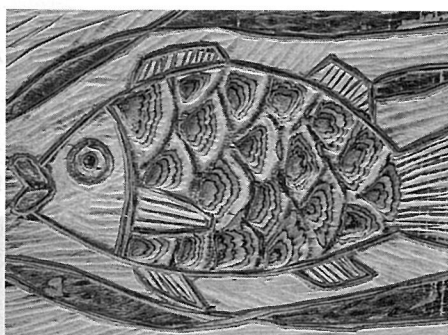


写真20 銅賞「ブラックバス」

方がうまくいって、おもしろくできあがりました。札幌市立北小6年森祐司君の「地下鉄」(写真21)は、アート彫刻板の色の特徴を生かして、地下鉄の少し暗いプラットホームの感じが、よく表現されています。

「奨励賞」の旭川市立千代ヶ岡小中川善君、旭川市立西神楽小6年伊賀裕章君、谷口修一君の作品や旭川市立聖和小6年山本和也君、梅田由梨さん、旭川市立近文小5年馬場剛君、同6年中村真理子さん、美瑛町立美瑛東小村田恵吾君、旭川市立江丹別小6年伊勢昌司君、旭川市立北光小5年栗山絵美さんの作品は、どんな絵をどのような構図で彫るか、彫刻刀の使い方をどう工夫して縞模様を生かすかなど、更に工夫してみると、まだまだ面白く美しい作品になったと思います。

中学生の作品

今年から、中学生には大判のアート彫刻板を使ったことから、作品の質が極めて向上したように思

います。「金賞」受賞の厚沢部町立鶉中3年岩崎美沙子さんの「荒海の中のとび魚」(写真22)は、飛魚の単純化した形の美しさと対照的に、彫刻刀の細密なタッチで躍動的な泡立つ波の表現に成功しています。今回の出品作の中でも、ずば抜けて優れていました。

「銀賞」の占冠村立占冠中3年長舟洋子さんの「さくら」(写真23)は、枝の桜の花と散る花びら

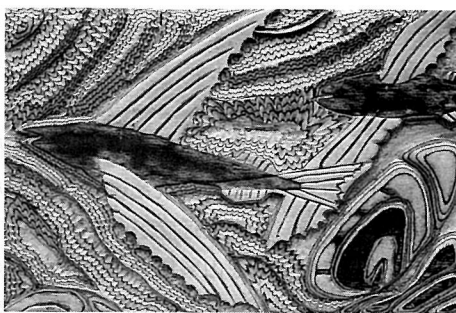


写真22 金賞「荒海の中のとび魚」



写真23 銀賞「さくら」

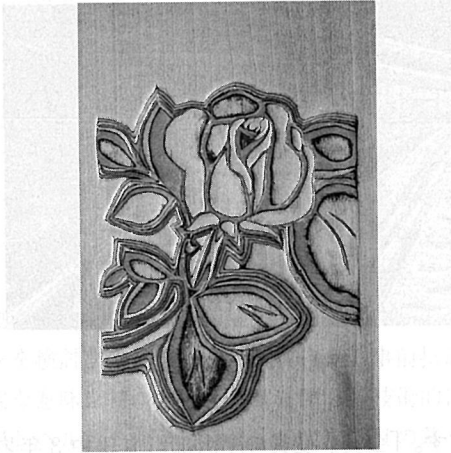


写真24 銀賞「バラ」

が、少し暗い背景の中に浮き出ており、また、背景の部分の彫刻刀の刃先の使い方、微妙な変化が生まれ、奥行きのある表現になりました。旭川市立永山中2年山口記史君の「バラ」(写真24)は、バラの花の思い切った形の単純化と現れる線の重なりを平行に使い、細かいタッチよりも平面的な形の組み合わせと、形それぞれの縁の盛り上がりやの感じの効果を工夫し、デザイン的なすっきりした作品になっています。

「銅賞」の当麻町立当麻中3年暮地本宙己君の「湿原の春」(写真25)は、近景と遠景の彫り方に変化が工夫されていて、遠近感がよく出ています。旭川市立永山南中2年徳山梨恵さんの「力強く咲く花」(写真26)は、積層板の特性を生かして表された線の重なりが部分の形にボリューム感を与え、不思議な抽象画を思わせる表現になっていま

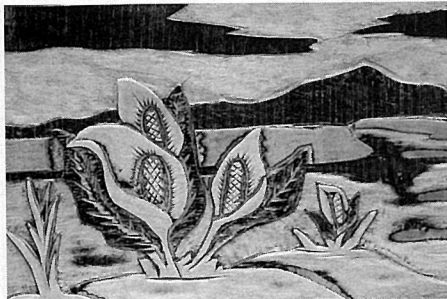


写真25 銅賞「湿原の春」

す。旭川市立神居中3年濱本英剛君の「孔雀」(写真27)は、尾羽根の彫り方に神経が行き届いています。

「奨励賞」になった作品では、旭川市立永山中2年荒谷麻理さんの「鳥」や当麻町立当麻中1年高島直樹君の「空を舞う鶴」、旭川市立神楽中3年鹿島智基君の「海の幸」の丁寧な彫り方、旭川市立神居中3年東田裕子さんの作品「はまなす」のほかしを生かした版画のような表現は、彫り方の工夫が美しく成功していました。また、アート彫刻板を「透かし彫り」のようにして部分をくりぬいた作品、旭川市立永山南中小坂彩さんの「森のやすらぎ」や北海道教育大学附属函館中上條考良君の「水仙」、更に中心となる形の縁に沿って背景部分を切り落としてしまった作品旭川市立北都中3年奥山剛君の「フクロウ」や小樽市立銭函

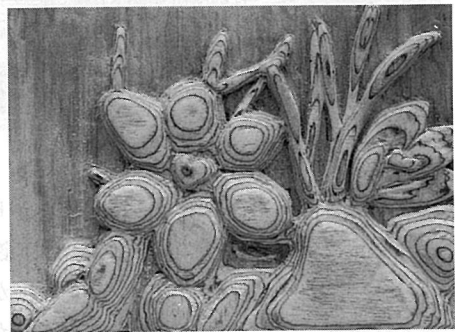


写真26 銅賞「力強く咲く花」

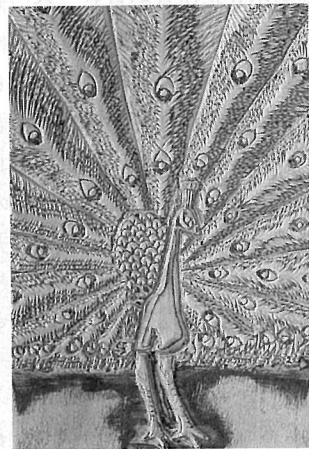


写真27 銅賞「孔雀」

中3年山内眞弓さんの「Peacock」、同校1年梁川加奈子さんの「花のささやき」がありました。大きさによっては、ブローチになる「堆朱」のような工夫のデザインです。また、彫り出した板の部分に淡彩の包を加えて美しい効果を出しているものもありました。このような技法は予想外でしたが、さすがに中学生らしい発見と工夫で、審査の段階でも、これで作品として成功すれば、この素材の新しい表現として見直さなければならないだろうという意見がありました。

おわりに

最後に、木工作・木工芸の指導について少しふれておきます。

木工作は、小中学生にとって興味と関心が高く、創造的・技術的に意欲を持って取り組める表現活動ですが、学校の限られた「図工・美術」の授業時間内で完成度の高い作品を製作させることは難しい面があります。「クラブ活動・部活動」などを通じて、工具の整備や事前のデザイン構想段階にも余裕をもたせた時間を確保して指導できる工夫も、各学校で検討してほしいと思います。

表1 木材の性質と処理方法	表2 木材の加工式の分類
化学的処理 防腐剤の塗布、漂白剤による漂白	切断加工 丸太の切断、板の切断
物理的処理 乾燥、圧縮	曲げ加工 蒸気曲げ、熱曲げ
機械的処理 削り出し、旋削	接着加工 木工用接着剤の塗布